

周辺の  
みどころ

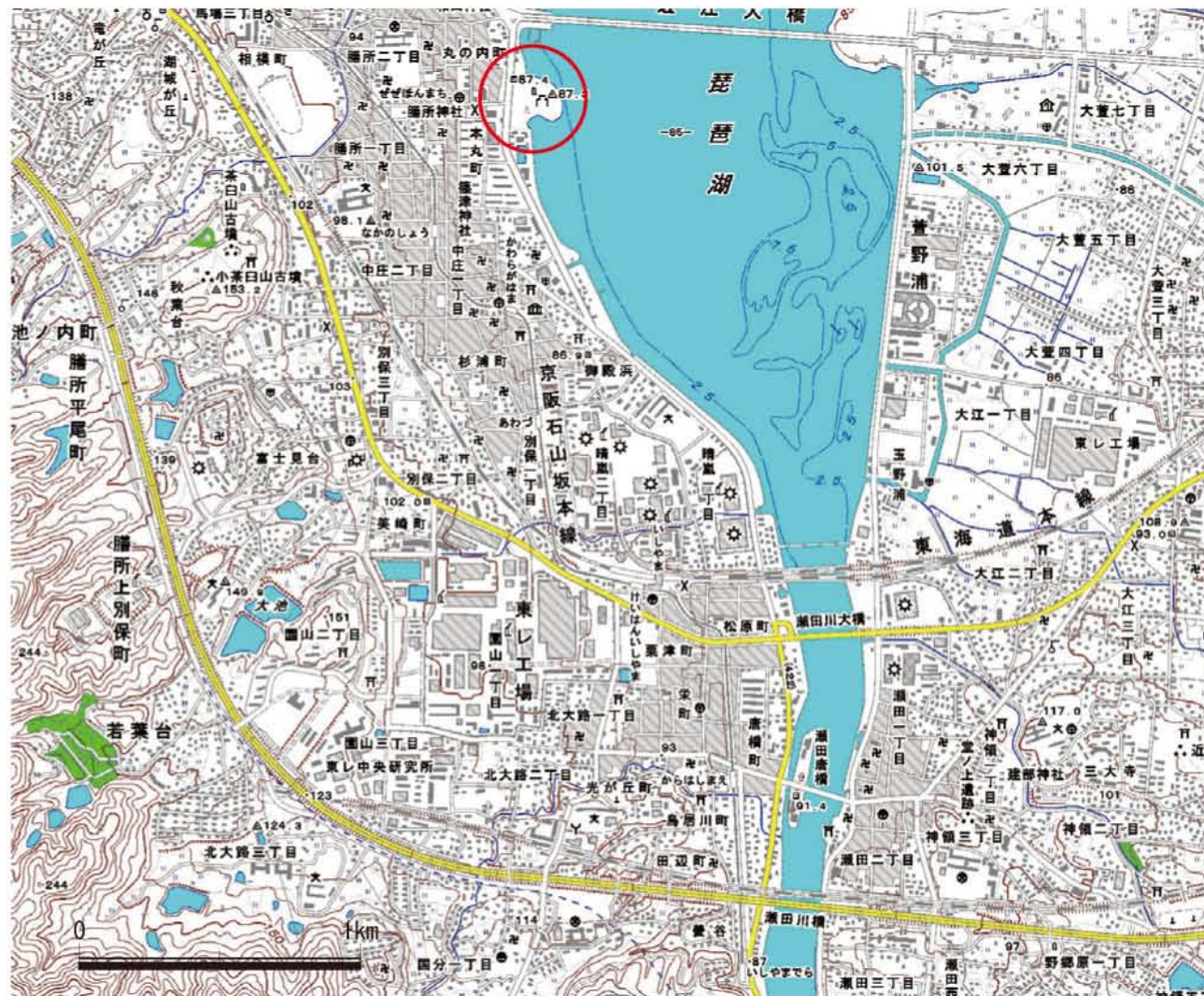
近江八景「栗津晴嵐」に描かれた栗津の地は風光明媚な景勝地として、藩主別邸や近代の文人・画家などの別荘が多く営まれた。

本多神社は、寛文4年（1664）に藩主本多俊次が隠居所として設けた浜御殿があった場所で、境内にはその庭園の一部が残る。

琵琶湖岸の蘆花浅水荘（記恩寺）は、京都画壇の重鎮であった日本画家 山元春挙の別荘を寺院としたものである。本屋や離れ・持仏堂など（重要文化財）は優れた近代和風建築であり、琵琶湖や対岸の三上山を借景とした美しい庭園を眺めることができる。



記恩寺（蘆花浅水荘）



【アクセス】

- 膳所城跡  
京阪電鉄石坂本線「膳所本町駅」下車 徒歩7分
- 膳所神社  
京阪電鉄石坂本線「膳所本町駅」下車 徒歩1分
- 本多神社・蘆花浅水荘  
京阪電鉄石坂本線「瓦ヶ浜駅」下車 徒歩5分

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】  
(関連文献・関連施設)

- 『図説大津の歴史 上巻』大津市 平成11年

# 湖城 膳所城跡

大津市本丸町



南西上空からみた膳所城跡（大津市提供）

近江の戦国時代、琵琶湖を征するために多くの水城が築かれた。

関ヶ原の戦いの翌年、徳川幕府が天下静謐を願って、琵琶湖畔に膳所城が築かれた。ほどなく戦乱の世は終わりを告げ、これが近江に築かれた最後の水城となった。

湖に浮かぶがごとき華麗な天守や櫓は、大津～矢橋航路の船々からも望むことができ、近江八景の1つ「栗津晴嵐」の風景として、多くの浮世絵や絵画にも描かれた。

琵琶湖と一体となった膳所城。当時の姿そのままで見ることができないとはいえ、水の宝に相応しい。







膳所神社表門（重要文化財）

## 湖城 膳所城跡

所在地 大津市本丸町

### 膳所城の築城

京阪電車浜大津駅周辺にあった大津城は、関ヶ原の戦いの前哨戦で西軍の猛攻を受け、本丸を残し灰塵に帰した。戦後、徳川家康は本多正信の進言を受け、攻められやすい大津城を廃し、湖上交通の掌握と瀬田橋の防衛に適した膳所の地に新たな城を築くことを決断した。

慶長6年（1601）（一説には慶長7年）に築城を開始した膳所城は、豊臣氏の大坂城を包囲するように築城・改築された天下普請の城郭群（姫路城・篠山城・亀山城など）の先駆けであった。

初代城主の戸田一西は、三河以来の譜代大名として三万石で入封した。一西がわずか2年で急死すると、戸田氏は息子の氏鉄が後を次いだものの、元和2年（1616）に摂津尼崎へ転封となった。その後、本多氏、菅沼氏、石川氏といった三河以来の譜代大名が次々と城主を勤め、慶安4年（1651）に本多俊次が伊勢亀山から七

万石で入城した後は、明治維新まで13代に渡って本多氏が城主を務めた。

### 城の構造

膳所城は、坂本城や大津城と同じく、琵琶湖に突き出た水城であり、城下を通る東海道と琵琶湖の航路、水陸2つの通路を掌握する城郭であった。

当初の縄張りは、最も湖中に突き出た本丸の北西隅に四層の天守をもち、本丸と二の丸が橋一本でつながる構造で、二の丸の三方を取り囲むように、北の丸や三の丸が設けられていた。

寛文2年（1662）の地震によって、大きく被災し、土砂で埋まった本丸と二の丸の間の濠を埋め立てて広い本丸を造り、もとの三ノ丸を二の丸と三の丸に分けるなど、大改築がなされた。

城下町は、城の西側を通る東海道に沿って南北に長く伸びており、城下の入口には街道を画する瀬田口総門と大津口総門が設けられていた。



篠津神社表門（上：重要文化財）

近江名所図会 膳所 矢橋渡舟（中）

芭蕉会館（下左）

城下の町並み（下右）



### 消えた名城

近江を代表する名城 膳所城と彦根城。この2つの城は対称的な明治維新を迎えた。天守や天秤櫓など、当時の姿を今に留める彦根城に対して、膳所城は現地に石垣一つ残さず地上から姿を消したのである。

明治3年（1870）、戊辰戦争などの戦費に耐えかねた膳所藩は、「廃城願」を明治政府に提出し、毎年莫大な修理費を要する城を自らの手で取り壊してしまった。

現在、城跡は湖岸道路や市街化のために壊さ

れ、本丸跡に造られた膳所城跡公園を含めて、当時の姿を示す遺構はほとんど残っていない。

ただ、廃城にともなう膳所城の門や櫓の一部は、大津市周辺の社寺に移築された。膳所神社の表門（重要文化財）や北門は、膳所城より移築されたもので、表門は本丸北大手門であった。また、篠津神社表門（重要文化財）は北大手門、若宮八幡神社表門も伝本丸犬走門を移したものである。芭蕉会館や六体地藏堂も櫓や城内の蔵を移したものと伝えられる。